

—探求・川にちなんだ万葉集の歌—

万葉の川心 第22回

川崎市立木月小学校教諭 船田 園子

山上憶良の七夕の歌十二首より

(巻第八 一五二八番歌)

天の河相向き立ちてわが戀ひし

君來ますなり紐解き設けな

一に云はく、川に向ひて

右のものは、養老八年七月七日に、令に應ふるなり。

天の河に向き合って立っていると、お慕いしていた君(牽牛)がおい
でになる(櫓の)音が聞こえて来た。さあ、紐を解いてお待ちしまし
う。

「あなたのこと、大好きだから。どこへ行ってもこのクラスの仲間だ
から。」

そう言つて、手を振つて別れたのは三月のことだった。転勤が二年毎
にやってくる家庭の子ども達は、そろそろだとわかつていながら、抵抗
したりあきらめたり、わくわくしたりめそめしながら次の土地へ移り
行く。きつと、慣れてしまえば、もう前のことなど忘れてしまうのかも
知れない。そして、その土地の子どもになっていく。子どもには子ども
の悩みがあるが、特有の楽天性がそれを支えている。一方、大人はどう
だろう。その土地に溶け込むのだろうか。それとも、常に別の故郷を、
心に想っているのだろうか。

太宰府の師大伴旅人や太宰府官人たちがおり、太宰府文学圏を形成し
た場所であったことはよく知られている。特に憶良は、漢才に優れて
いた。おおいに文学の話に花が咲いたのではと思われるが、憶良の研
究を重ねた人によると、「歌はぬ憶良」であったり、とにかく、国司
としての任を全うしようとした順良な仕事人であることが言われてい
る。「土地の人となる」というよりは、国司の立場はくずさない主義
だったようだ。

さて、七夕の歌は、巻第十では、秋の雑歌という部立の筆頭に九十
八首が詠まれている。中国の織姫彦星伝説が取り入れられた日本の行
事の一つである七夕は、もう千三百年前から日本人の心をうち、今も
引き継がれている。その星伝説とは、次の通りである。天の川の東に
住んでいた織姫は天帝の子で、いつも機を織り、その腕は巧みで、あ
ざやかな天衣を織っていた。独り身であることをかわいそうに思った
天帝は、川の西に住んでいる彦星と結婚することを許した。しかし、
結婚後、織女は機織りを止めてしまったので、怒った天帝は二人を引
き離し、七月七日の夜だけ川を渡って逢うことを許したという。深く
愛し合っているが、一年に一度しか逢えないせつない物語が異国の
日本人の心をうった。その一方、日本の七夕は、そもそも盆行事の一
環として、祖先の霊を祭る前の祓の行事であったと伝えられている。
神の嫁となるべき処女が海や川にさしかけた棚で機を織り、神の訪れ
を待ったという。衣は、魂を包む神聖なものである。それを織る

「棚機つ女」から「たなばた」と言われ、平安時代に「七夕」の字が
あてられたと思われる。同時に、旧暦の七月七日はもう秋で、麦の収
穫を祝う祭りでもあった。そこに中国の伝説が入り、それは、すぐさ
ま日本風にアレンジされた。中国では織姫が鵲橋を渡っていく。鵲が
羽を広げて二人の橋渡しをしたという。日本では、彦星が渡り舟でい
くか、または、瀬を渡って行くという。妻問婚が通例だった日本らし
く話をかえて、それが歌に詠まれている。異国の文化を自分らしく変
化させて取り入れる力を、万葉集の歌に感じる。それだけでなく、国
境をも越える人々の共通の想い、いとしさ、せつなさが歌にはあると
思うのである。

今年もまた、七月七日がやってくる。逢えるのだろうか。想いは変
わらないのだろうか。

転校していった子ども達と、いつか、会える日がくるといい。――